

YCE サマーキャンプ Bridhing Cultures 2005. 7.29-8.9

2025の夏はYCE委員会にとっては6年ぶりのサマーキャンプでした。世界9カ国から18人の青少年が来日し、元気に楽しく日本文化を学んで帰国していきました。青少年の教育、世界平和への草の根の社会活動として60年間つづいている国際プログラムです
そしてCampコンセプトは大きく「Showcase Of Japanese Culture」とし、東京でのキャンプ開催の意義を共有しました。本キャンプは「寺子屋キャンプ」「上野キャンプ」「メインキャンプ」3部構成となっておりそれぞれ中身も濃いためひとつずつご紹介します。

Overview

July			August								
	30	31	1	2	3	4	5	6	7	8	9
寺子屋キャンプ			上野キャンプ			メインキャンプ					
The Origin of Japanese Schools			The most academic city in Japan			Olympic legacy in the center of Tokyo					

Tokyo 2025 Concept "The showcase of Japanese culture"



#1 寺子屋キャンプ

来日生18人の夏、12日間のTOKYO2025は池上本門寺からスタートしました。遊びたくて仕方がないといった生徒たちにも『本キャンプは観光旅行ではなく、異国の文化を学び相互理解を育むための国際教育プログラムの一環です。』とあらためて、あえてスタートしました。結果なにが始まるのだろう、とより好奇心に火をつけたようでした。



■ お経の音色、太鼓の響、線香の香 そして蟬の声

日本の教育の原点は江戸時代、庶民の子供達でさえもお寺で「読み書き」を習っていたというすばらしい歴史にあります。お寺の醸し出す情緒感の中には「我が身をただす」といった感覚があり、西洋人もそう感じているように思えます。連日の朝5時からのお経に脱落者もなく、そんな心配をよそに、お経の音色、太鼓の響、線香の香りに自我を研ぎ澄ましまさしくマインドフルネス、そしてミニリサイタルでも聞くような恍惚感も味わっているようでした。西洋人にとって普段は蟬の声はせわしい存在のようですが、ここにくるととても心地よく感じたそうです。



■なぜ朝早くからお経をあげるの？「それはキリスト教で日曜に教会でお参りするようなことです。仏教では毎朝お経を唱えることで、日々の命に感謝を申し上げているのです」そしてすばらしい1日を迎えられるよう努力をする誓いの場でもあるそうです



■お焼香は何のためでしょう？「それは、お祈りと共に線香の尊い香りを神様や仏様にとどけているのです。」と僧侶の方が落ち着いた口調で語ると外国人にもよく伝わったようです(言葉はわからなくても)。この世とあの世をつなぐんだということを理解していました。



■写経はなぜ口で紙をかむのでしょうか？「それは息を直接お経の文字に吹きかけないためです。お経の文字自体が神様の化身だと考えられているからです」と。やってみると長い静かな息になり心も落ち着くように感じました。



■ ハイライトは伝統文化と現代マジック

いわば時間と空間を旅しながら、現実と幻想の旅をする。そんな素敵な旅をマジシャン瞬時に生徒たちを連れて行ってくれました。まさに奇跡のようなマジックが今回も生徒たちを虜にし、言葉の壁を完全に超えました。空の上から尊いBuddhaも驚いているのか、いやいや全部お見通しなのか。デジタルは2000年前からお見通しさ・、など。いずれにせよ生徒たちを暖かく見守ってくれていると実感しました。

□ 言葉の壁

キャンプ2日目、ロシアの女子生徒が一人「どうしても歯が痛い」ということで歯医者へ同行しました。これからも痛みがつづくのはあまりにも不憫と思いつつ、本人は神経を取るという選択をし泣きながら治療をしました。歯医者動向にはコミュニケーションとしては難しいことも多いです。Googleトランスレータがきっちりサポートしてくれました。

#2 UENOキャンプ

夏の不忍の池は息をのむほどに美しかった。池上本門寺で“Lotus Sutra”の写経を学んだ後にはまさしく最高の2nd ベニューとなりました。泥水の上にさく美しい蓮の花は法華経のシンボルとして、人間界の天井にある天国に例えられています。蓮の花に馴染みがなかった生徒等もこのシーンを心に焼き付けて仏教文化を語る上で必ずでてくる蓮をすこし身近に感じたようです。そしてこの上野の地は日本が近代国家へと発展する舞台の地でもあります。



■上野の歴史は面白すぎです。

Uenoキャンプではスペシャルサポーターとして東京文化LCの前会長・茅野Lに上野の歴史の講義をいただきました。上野商店会で三世代に渡って商いをなさっている、上野通のお一人です。そのお弟子さんにあたるShinpeiさん、レオクラブメンバーとで語ります。「ラスト侍はだれですか？」との問いかけに「トムクルーズ」と返してきます。生徒等は少し知っていて、すごく興味があるようです。日本人にとってはラストサムライを西郷隆盛と連想する人が多いのです。上野を攻め落とした人物であるが、ラストサムライ。トムクルーズの敵方にその人物はいた、ということはギリギリ伝わったようです。



■ 礼法

侍といえば忠誠心、勇気、名誉などを重視しています。それを体現している礼式を一緒にやりました。日本では現在でも武道を学ぶ祭に必ず稽古の最初と最後に実践している礼法、すなわち「正座・黙想・礼」です。どの国の生徒もきちんと座り、気持ちが十分にのったうえで、しっかり御辞儀をしていました。外国の人がやっても美しい姿勢、あらためて美しい礼法だと感じたものです。



■ 江戸城無血開城と上野。せっかく学んだ礼法は目に焼き付けてほしいものです。侍がしっかりと意見を述べ合うときにこの姿勢はとても説得力があります。ここに侍の腹の座りが見て取れるのです。世界史上の奇跡の出来事「江戸城無血開城」もこのように侍同志の話し合いで行われました、そして海外から侵略されることなく日本は発展することができました。この日本史の一場面を将来に渡って覚えておいてほしい、と世界平和を語りました。

Miraculous story of Samurai

1868 Bloodless surrender of Edo castle



Later
Emperor
Meiji



Saigo Takamori
Head of government army

Katsu Kaishyu
Head of Shogunate army,



Last
Tokugawa
Shogunate

15th Shogun and Samurai retreat to **Ueno**

■ 盆踊り。歴史を学んだ後は 楽しくお祭りの勉強です。8月前半、日本中でご先祖様をお迎えするこのお盆休みをまえに、一緒に踊りの練習をすることこそ文化の学びです。「盆踊りDJ」なる肩書をもつShinpeiさんとレオクラブメンバーは英語でインストラクションしています。炭坑節の振り付けは”Dig, Dig! Carry Carry. Push, Pusshu” と楽しそうです。て、運んで、詰めているいるようです



■ 浴衣への憧れ。伝統的な和服は着装してこそ深みや美しさを実感できるものです。帯ひとつとっても素材、柄、色、結び方、そして着物との調和などその楽しみは浴衣でも体験可能です。どうしても浴衣が着たかったというカリフォルニアのNelleyさんはお気に入りの浴衣をきて、日本の女性の慎まやかな美しさへ。



□日本の礼式

日本の正座は、背筋を伸ばし、心を落ち着かせる効果もあるとされています。やってみるとかなり痛いということでしたが、これほど美しく収まるのかと思ったものです。日本文化をあらためて認識しました。

#3 代々木メインキャンプ

渋谷スカイから新宿を望むと広大な代々木の森を見下ろすことができる。かつての東京オリンピックの選手村の跡地である国立オリンピック記念青少年総合センターこと通称オリセンはこの抜群に恵まれた環境にあります。本キャンプのメインキャンプに相応しいオリンピックレガシーなのです。東京のど真ん中に緑も多く、食事や会議室の設備がそろっており、全国から全世界からの生徒が集まってきていました。



■タウンウォーク。

・東京の夏を凌ぐため基本的に午前中はタウンウォークをやろうと、渋谷、東京駅、銀座などを3グループにわけて回りました。来日生18人と東京の地下鉄を使っでの移動は予想を超えて時間がかかりました。そもそもみんな時間通りにあつまらない、忘れ物はする、きまったところで買い物しないなどなど ちょっとしたことばかりとはいえ全体の進行に大きく影響します。時間の感覚はゆるく、なぜ時間を気にしないのかも日本人としては理解できません。気温は上昇していけど来日生の好奇心は抑えられないようです。Insta,、TikTokむけの撮影会が至るところで始まりました。[渋谷スカイ動画](#)



■Mt.Fuji & Ice Cave

・夏の富士山といえば、たいてい雲に隠れて「今日はお休みです」とばかりに姿を見せてくれません。ところがこの日は——ドーンとそのお姿を披露してくれました。五合目あたりを散策しながらそびえる頂上に「これがあの富士山かー」と思い思いに口づさみ、アルプス自慢のスイスの生徒もこれは”Japanese beauty rivals”と感慨深げでした。そして氷穴の散策です。南国出身のスペイン、ペルーの生徒は本当に凍えていました。寒さにつよいオランダ、ロシアの生徒は寒さにつよいだけでなく対策もバッチリでしたが、南国の生徒は寒さに弱いのに対策もなし。お国柄、性格、いろいろ違うようです。



・折り紙は日本の誇るべき伝統文化です。330-C地区のYCE委員のみなさんの協力をへて折り紙教室を開催しました。「折目正しく」「折り合いをつける」など日本人の価値観や作法にもあらわれている「折る文化」はハサミやのりを使わない伝統芸術を生み出したのでしょう。今回は誰もが知っている鶴やカブトをつくりました。教え方も上手で、生徒も起用で派なカブトをかぶって記念撮影です



・海レジンアートをご存知でしょうか？ご覧の樹脂を使って各自で配色してデザインして海の波をつ作りします。イギリス、クロアチアの生徒たちは知っているようで、このキャンプで体験できるとに感激しているようでした。日本人アーティストのこまやかな技術と自然への敬意を実感してもらうために全員一個づつつくってお土産としました。日本の伝統歴史からはじめた文化講義の最後を最新アートで飾りました。翌日に最終仕上げをして生徒たちが自分の作品をみる表情は喜びに満ちていました。



・330-B地区のYCE委員のみなさまの協力で横浜トリップ。馬車道にある横浜市役所では臨時国際会議を開催できたようです。カナダの女子生徒の優秀なことといったら驚くほどです。“For over 250 years, Japan was closed to the outside world. This helped the country stay peaceful and grow its own culture.”



□さいごに

・十二日間にわたるキャンプを終え、若者たちは元気に、喜びと充足を胸に、そしてすこし寂しさを湛えて、それぞれの祖国へと旅立っていきました。ここで培われた友情と絆は、やがて彼らが責任ある大人へと成長したとき、確かな灯火となって人生を照らし続けることでしょう。「戦争など決してあってはならない。あの国には、私の友がいる。」

こんな思いが、彼らの未来を守り、世界の平和を支える力となるに違いありません。

330-A地区 YCE委員会
委員長 L城戸正幸